

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00651

研究課題名（和文）首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究

研究課題名（英文）Description of old substratum of Tokyo dialect and research on diffusion of Metropolitan dialect

研究代表者

久野 マリ子 (KUNO, Mariko)

國學院大學・文学部・名誉教授

研究者番号：90170018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：研究の目的：伝統的な東京方言を記述することと、首都圏方言が全国の若年層へどれだけ広がっているかを調査することである。

成果：『新東京都言語地図 文法・語彙篇』を刊行した。東京都の言語実態を明らかにし、年代差と地域差を考察して報告書にまとめた。首都圏方言が各地の若年層に広まっている実態をアンケートおよび臨地調査により調査したが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により臨地調査が十分に実施できず、分析を完成させられなかった。東京都の方言は島嶼部と区部・多摩地区とで異なることが改めて確認できた。23区と多摩地区では言語体系が異なり、23区の中でも旧15区は周辺の地域と違いがあることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東京都の高年・青年層の方言体系を臨地調査を実施した『新東京都言語地図 文法・語彙』を完成させた。複雑な東京方言の実態を捉えた成果で、今後の共通語研究の比較の基準となる。例えば「～じゃん」は首都圏方言として全国に拡散している、この研究でごく短期間に東京都内に広がり、次に全国に広がった。またその使用意味は限定的であることが明らかになった。

この成果は東京方言の実態を実証的に明らかにしたことで画期的である。とくに音声言語としての共通語の変化のスピードの考察に役立ち、現代日本語の考察や日本語、標準語の研究、スタンダード日本語の研究の基礎となる。日本語史や国語教育や日本語教育にも貢献できる。

研究成果の概要（英文）：Research Objective: To describe the traditional Tokyo dialect and to investigate the extent to which the Metropolitan dialect has spread to young people across the country.

Achievement: "New Linguistic Atlas of Tokyo -Grammar and Vocabulary" was published. The actual linguistic status quo in Tokyo was clarified, and age and regional differences were examined and compiled into a report. We investigated the actual situation of the spread of the Tokyo metropolitan dialect among young generation in 11 regions by questionnaire and 5 field work survey, but due to Covid19 infection, the field work survey could not be sufficiently conducted, and the analysis could not be completed. It was confirmed once again that the linguistic system of Tokyo differs between the islands and the wards and Tama areas. The linguistic system is different between the 23 wards and the Tama district, and among the 23 wards, the former 15 wards are different from the surrounding areas.

研究分野：方言学, 社会言語学

キーワード：首都圏方言 新東京都言語地図 地域差 年代差 若年層への伝播 音韻 文法 語彙

1. 研究開始当初の背景

現代日本語と共通語の研究のために東京都のことばと首都圏のことばに実態解明が必要とされていた。日本語の話しことばは共通語とされる。共通語は東京方言を基盤とする。東京都の音声実態に注目した実態調査が必要とされていたが、大都市の言語であるため調査研究が困難であった。東京近隣の方言では高年層が古層を保っていて、高年層の話者から聞き取り調査が可能である。さらに共通語は東京都だけではなく千葉・埼玉・神奈川の方言も合わせた首都圏方言として全国に広がっている。その実態を明らかにする必要があった。

2. 研究の目的

(1) 東京都のことばと共通語として全国に広がっている首都圏のことばの話しことば(音声言語)を明らかにするのが目的である。東京都には江戸語を継承する方言と、東京方言の古層を保ち伝統的関東方言の特徴をもつ首都圏方言がある。(2) 首都圏方言が丁寧でない共通語として全国に広がっていることを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 『東京都言語地図』(1986 東京都教育委員会)のあと東京都立大学大島一郎研究室で行った未整理の『新東京都言語地図』を完成させる。この資料は東京都の音韻・アクセント・文法・言語意識について聞き取り調査を行ったもので、高年層と青年層の資料がある。地図作成には國學院大學大学院久野研究室の大学院生が中心となり作成した。(2) 全国主要方言の若年層を対象に、首都圏方言の言語事象の実態を調査する。調査はアンケート調査と、現地に赴いて聞き取り調査を行う。調査には研究代表者と久野眞氏が行き、入力作業は研究室の大学院生と業者に委託した。

4. 研究成果

『新東京都言語地図 文法・語彙篇』を完成させた。調査は、1989(昭和64・平成元年)年～1993(平成5)年。話者は、話者・高年層 1902(明治35)年～1935(昭和10)年生78名・青年層 1955(昭和30)年～1968(昭和43)年生50名。合計128名。調査地点数は126地点。調査項目は283項目。音韻(64)、アクセント(367)、文法・語彙(97)。地図の枚数は、音韻(64×2)、アクセント(367×2)、文法・語彙(97×2)、合計1056枚の地図となった。

『新東京都言語地図』から得られた知見

(1) 東京の広がり東京方言の地域差と年代差に関係があることが分かった。地理分布から東京市(江戸・旧15区・旧35区と、多摩地区)の対立があることが分かった。

(2) また、東京の地域の拡大と鉄道網の広がりに関係があることが分かった。23区対多摩地区の対立は鉄道の整備と関係がある。

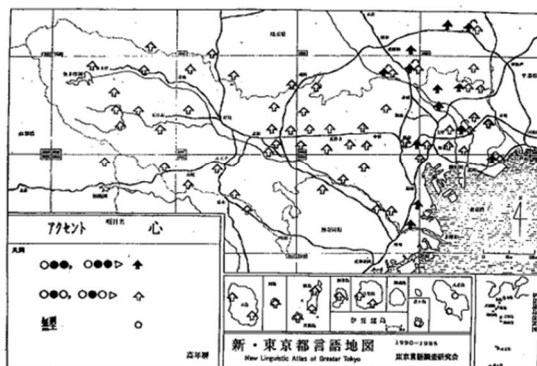
(3) 地図から東京の拡大と、交通網の広がりとの関係が見える分布図

「心」のアクセント変化

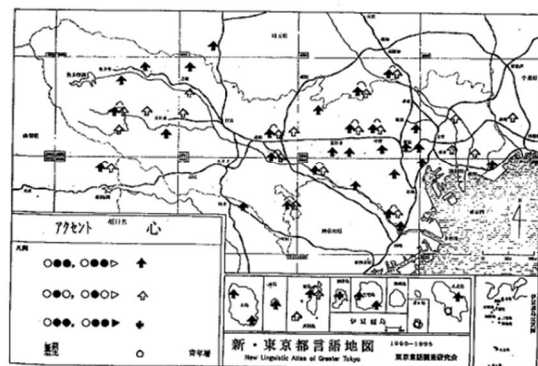
『研究初期は白地図にゴム印を押して作成した。大島(1996)にある地図はゴム印を押して作成した地図で、主な鉄道路線と河川が表示してある。明治初期の市街地(旧15区)とその外側の昭和初期の市街地(旧東京35区)が見て取れる。また、山手線と中央線が示してある。

大島地図1、高年層と青年層

「心が」高年層 大島地図



「心が」青年層 大島地図

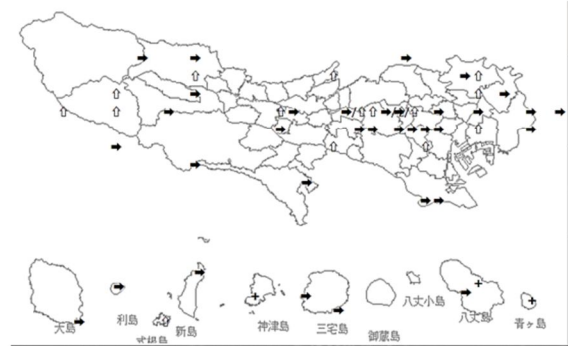


同項目でのWeb地図2

以下にしめす地図はweb上の地図である。左が高年層、右が青年層

「心が」高年層 Web地図

「心が」青年層 Web地図



記号	アクセント型	説明	高年層数	青年層数
→	ココロ] ガ [○●●▷]	新しい型 尾高型	12	34
↑	ココ] ロガ [○●○▷]	伝統的型 中高型	57	16
+	ココロガ [○●●▶]	新しい型 平板型	3	3
無	無アクセント	八丈、青ヶ島	3	0

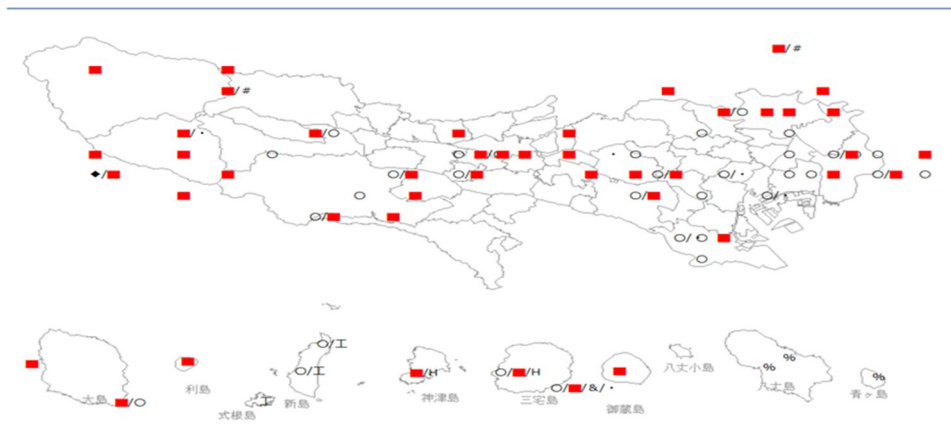
大島地図は調査地点数が少ないが、高年層では中高型が圧倒的に優勢である。尾高型が山手線内と東京東部と埼玉東南部に認められる。青年層では中高型は減り山手線内や東京都東部に点在していた尾高型が東京都全域に広がっている。Web 地図「心が」の項目の地図を示す（地図2）。Web 地図では地点は緯度・経度に従って地点が表示されていて市町村合併で地名が変わっても記号の位置は変わらないので優れている。Web 地図では凡例に記号の数が表示されるから型の優劣や年代差が分かりやすい。高年層では中高型が最も勢力があり、青年層では尾高型が最も勢力がある。中高型 尾高型という年代差が見られる。さらに、高年層では尾高型は旧 15 区を含む東京都の東部と千葉や埼玉に分布するという地域差が見られる。高年層で東京東部旧 15 区に点在した尾高型が、青年層では多摩地区や、伊豆諸島に広がっている。伝統的な尾高型から新しい中高への変化が伊豆諸島にまで見られるのは興味深い事象である。このような傾向を示す項目は、他にも確認できる。2 拍語についていえば「姉」「北」「鹿」「雲」「梅雨」の 5 語である。

文法項目 「行こう」の文法形式の変化

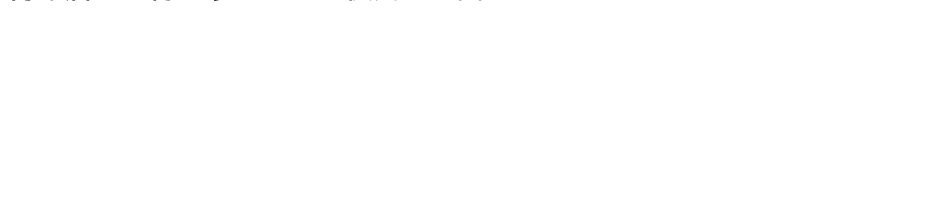
高年層 「行こう」べーの使用 地図3と青年層 「行こう」べーの使用 地図4を示す。

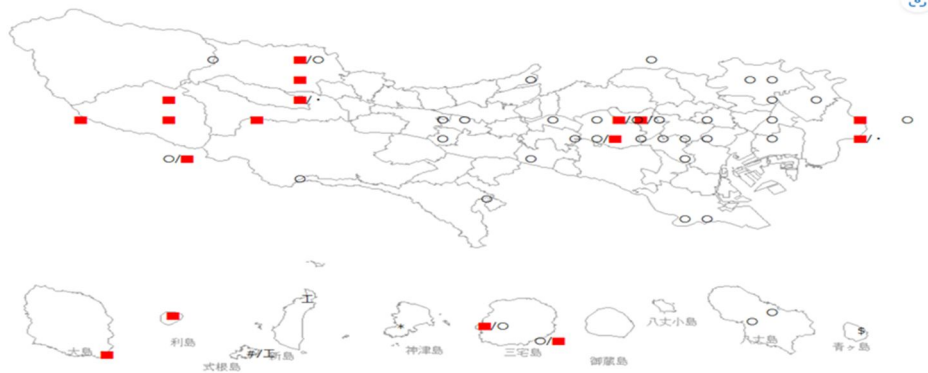
「～べい」の使用は年代差と地域差が見られる。「べい」は江戸時代には「六方詞」として文献にも現れ、江戸語に存在していた。地域差としては高年層では「～べい」は旧 15 区では見られず、それ以外の地域では優勢である。年代差としては青年層では「～べい」は劣勢である。確認できるのは多摩地域と千葉、伊豆諸島に見られるだけで、それ以外の地域では用いられない。

高年層 「行こう」べーの使用 地図3



青年層 「行こう」べーの使用 地図4





凡例

記号	語形	高年層	青年層	記号	語形	高年層	青年層
	ダンバー	1	0	*	バー	0	1
■	ベー	44	17	&	ノー	1	0
○	イコー	33	36	%	ゴン	3	0
#	ヤベ	2	1	\$	ゴンノー	0	1

(4) 『新東京都地図』から見られる東京都の言語変化の傾向

多くの項目で年代差が認められる。

高年層では伝統的な東京方言の特徴が残っているが、青年層では共通語化が進んでいる。

調査分野によって分布のある分野とない分野がある。

- ・音韻では分布がある項目は少なく、アクセントでは23区対多摩地区というような大まかな分布が見られる項目がある。
- ・文法では旧15区とそれ以外という分布の見られる項目があり、旧東京市（江戸）とそれ以外の地域という対立の分布が見られる。
- ・語彙では分布の見られる項目は少ない。

全体項目を通じて高年層では豊富な方言の変種が認められる。

伊豆諸島は音韻、アクセント、文法、語彙で特色がある

『新東京都言語地図』の残された問題は、地図の解釈と東京都の言語の纏めが十分ではない。

入力ミスのデータの見直しと新しいデータの追加が必要である。

(5) 首都圏方言の拡散を明らかにするために、岐阜と福岡で高校生のアンケート調査を実施した。1地点は調査は終わっている。残りの1地点においてはアンケート調査のみ実施するも新型コロナ蔓延により資料確認のための臨地調査を実施することができなかった。全体の傾向としては「全員」をゼーイン、店員も定員もテーインとする回答が大勢を占めた。さらにゼーインのアクセントがゼーインのように第3拍のあとに下がり目が来る型が聞かれた。首都圏方言の新しいアクセントの傾向と予測される。

<引用文献>

大島一郎(1996)『東京都の言語実態 言語地図から見る』『日本語研究諸領域の視点』上巻 平山輝男博士米寿記念会編 明治書院

久野マリ子・竹内はるか・坂本薫(2022)『東京都のことばの年代差と地域差 新東京都言語地図』日本方言研究会 第115回研究発表会予稿集

久野眞(2023)『江戸語・東京語・首都圏方言』『首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究 令和4年度成果刊行書』

久野マリ子(2023)『東京方言の変化』『首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究 令和4年度成果刊行書』

竹内はるか(2023)『新東京と言語地図』にみる2拍名詞アクセントの分布の特徴』『首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究 令和4年度成果刊行書』

坂本薫『新東京都言語地図』にみる動詞の「ベー」が接続した形式『首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究 令和4年度成果刊行書』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Mariko Kuno	4. 巻 45
2. 論文標題 “ The New Linguistic Atlas of Tokyo and spoken Japanese spoken language ”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Estudos Japoneses, n.45.	6. 最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野 マリ子	4. 巻 185
2. 論文標題 『新東京都言語地図』の調査東京都東京方言調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多摩のあゆみ	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 久野マリ子
2. 発表標題 「東京都・首都圏方言の実態」 移りゆく日本語の話しことばー
3. 学会等名 第13回ブラジル日本研究国際学会 ・第26回全伯日本語・日本文学・日本文化大学教師学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久野マリ子
2. 発表標題 「『新東京都言語地図』から見る平成の東京方言」
3. 学会等名 東京音声研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野マリ子、竹内はるか、坂本薫
2. 発表標題 6. 発表標題 東京都のことは年代差と地域差 新東京都言語地図
3. 学会等名 日本方言研究会 第115回研究発表会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 久野マリ子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 國學院大學	5. 総ページ数 256
3. 書名 新東京都言語地図－文法・語彙 平成初期の東京のことは	

1. 著者名 久野マリ子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 國學院大學	5. 総ページ数 48
3. 書名 首都圏方言の古層の記述とその全校若年層への広がりに関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------